

北伊豆地震概報
中央氣象台

14.6二
301

14. 6二-301
1200501223706



始



昭和五年十二月二日刊

北伊豆地震概報

中央氣象臺

昭和五年十二月二日刊

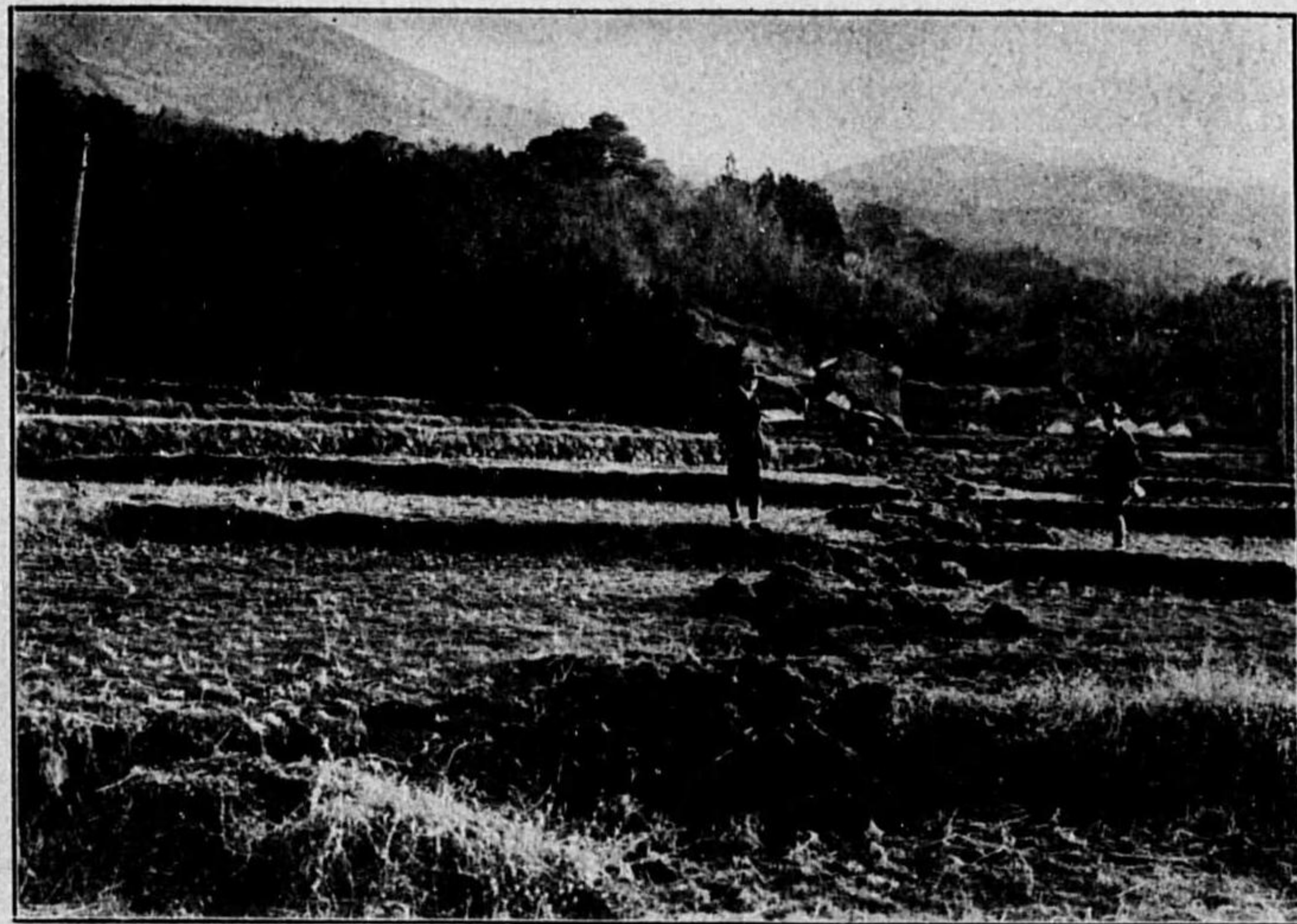


地震概報

中央氣象臺

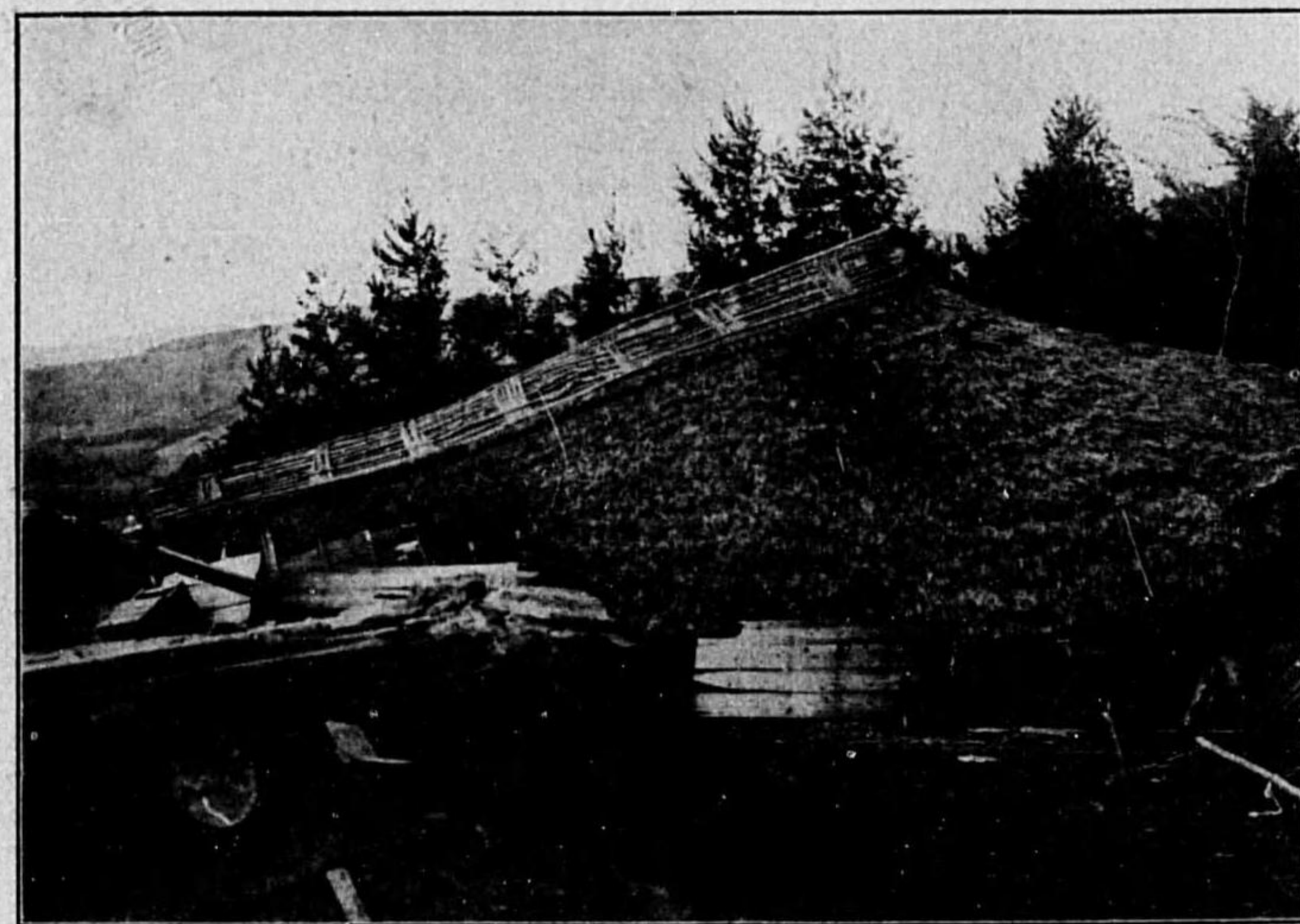


發行所寄贈本



第一圖

北は塊地方東へ方南は塊地方西めたの動運塊地) 層斷主しれは現に地盆那丹
 家民の邊西畑區那丹は家の面正。す寫ひ向へ方南りよ方北地盆(す位變へ方
 く貫を下束の此層斷てに



第二圖

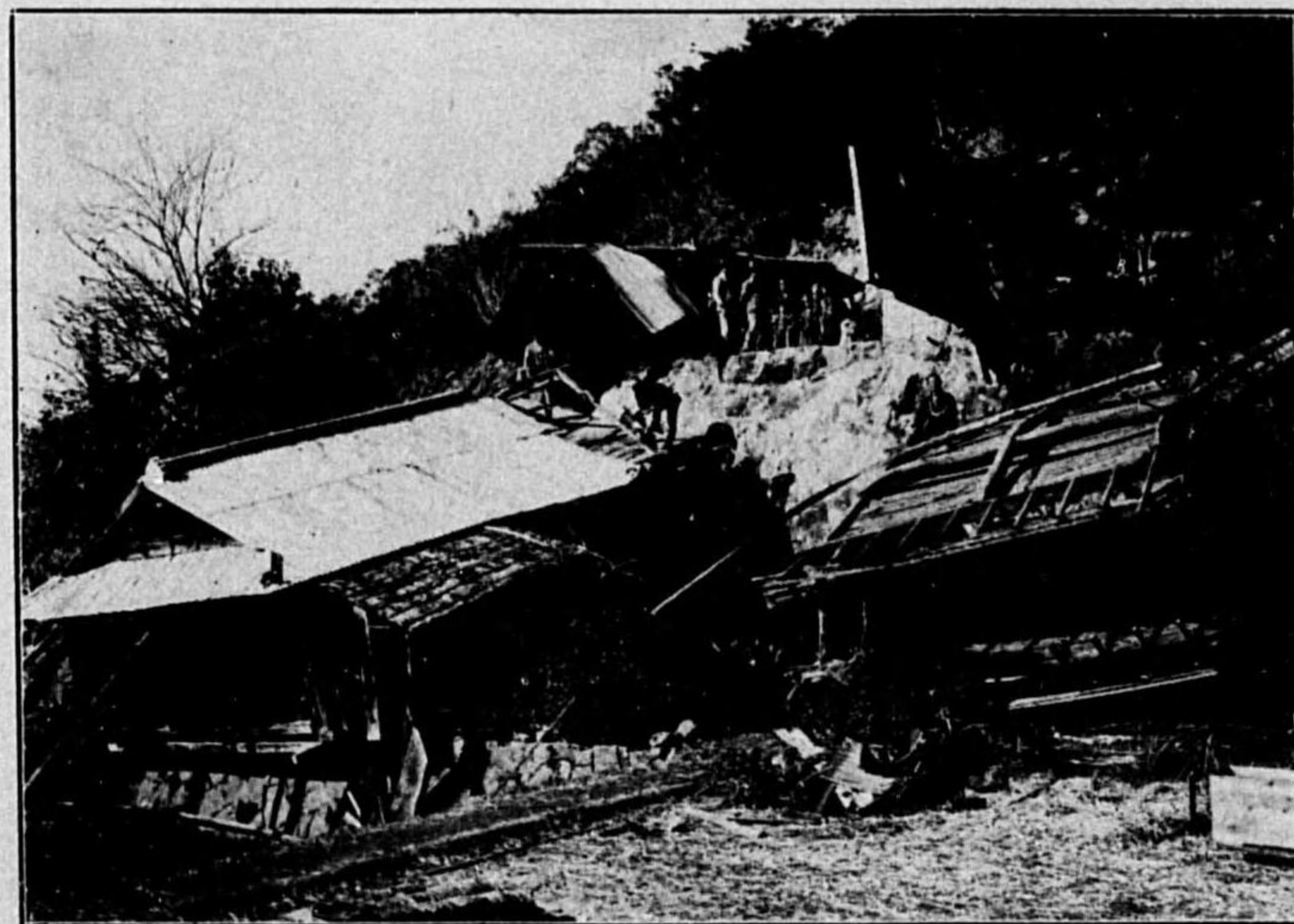
五米一差落。す寫てひ向に方北りよ方南を家民の邊西畑層斷那丹

昭和十二年二月

地質調査

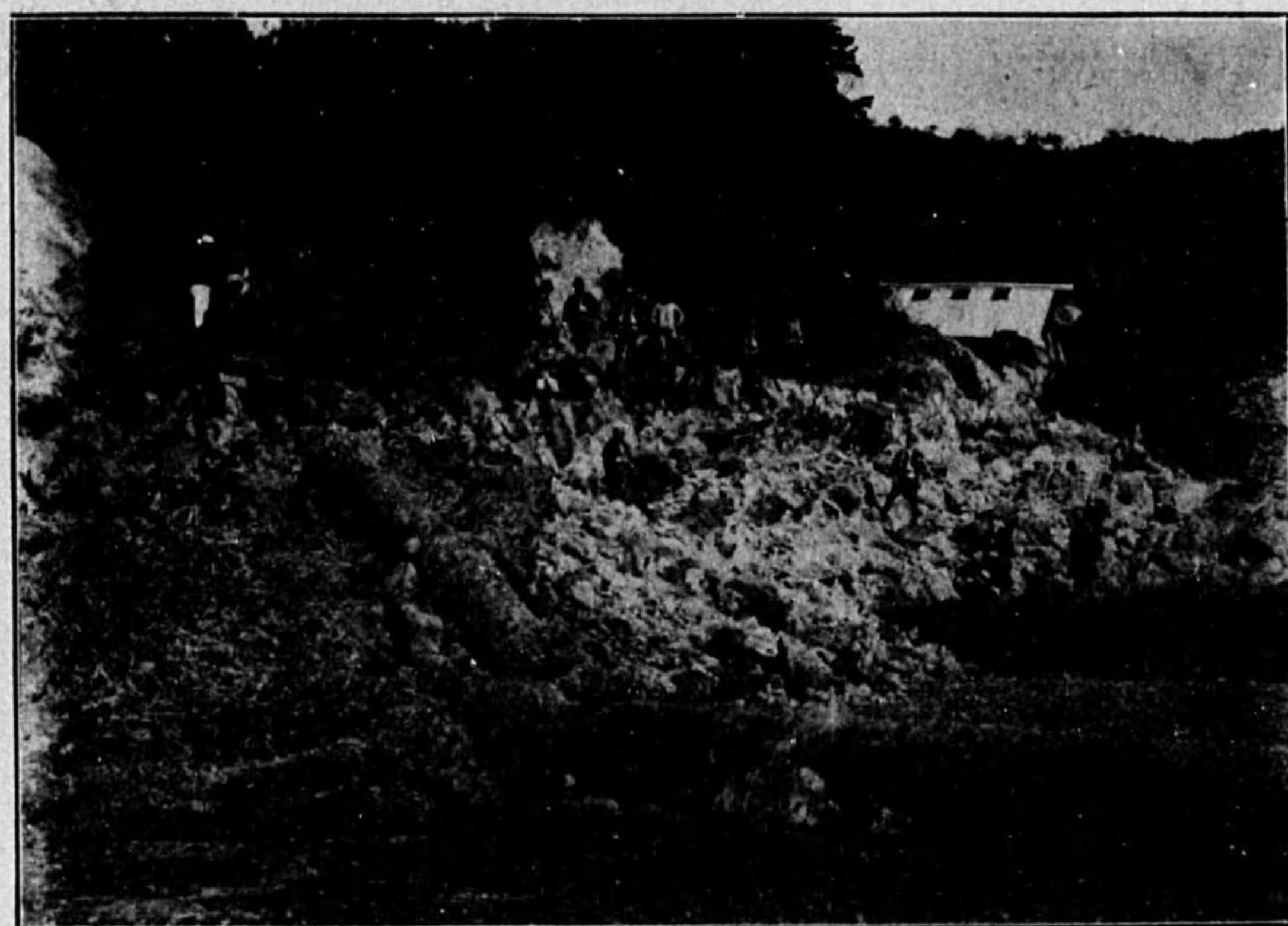
中央地質院





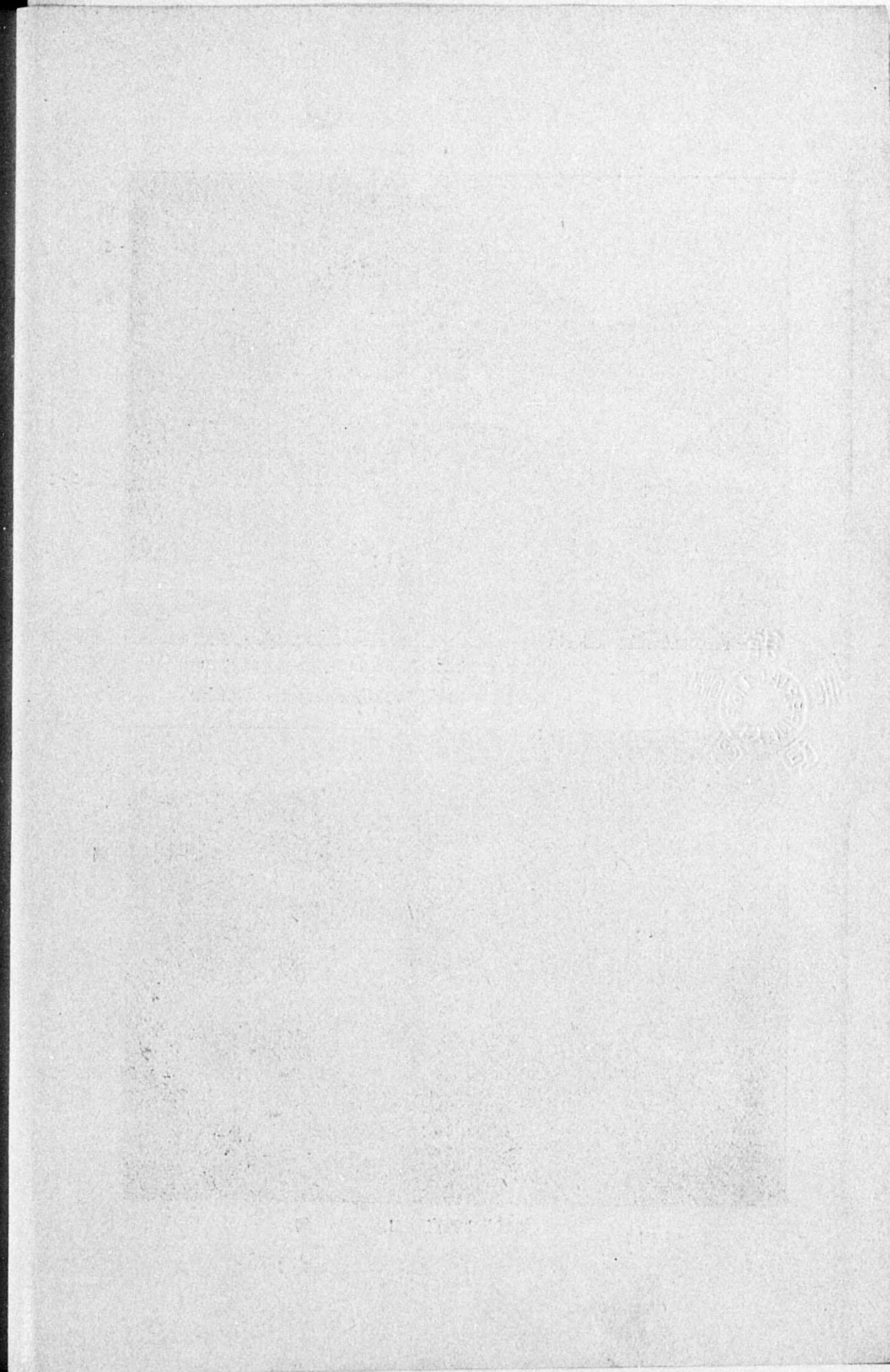
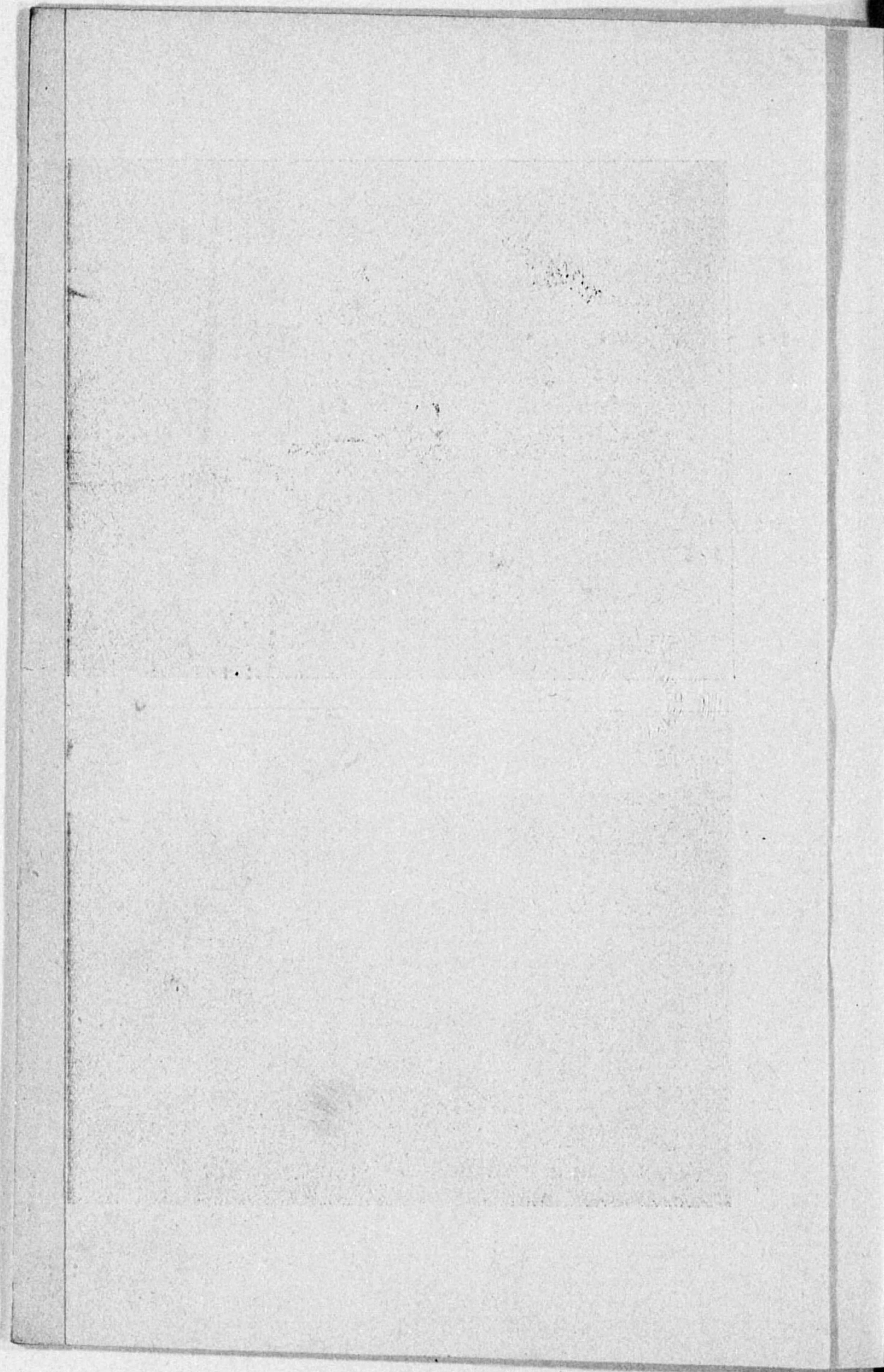
第三圖

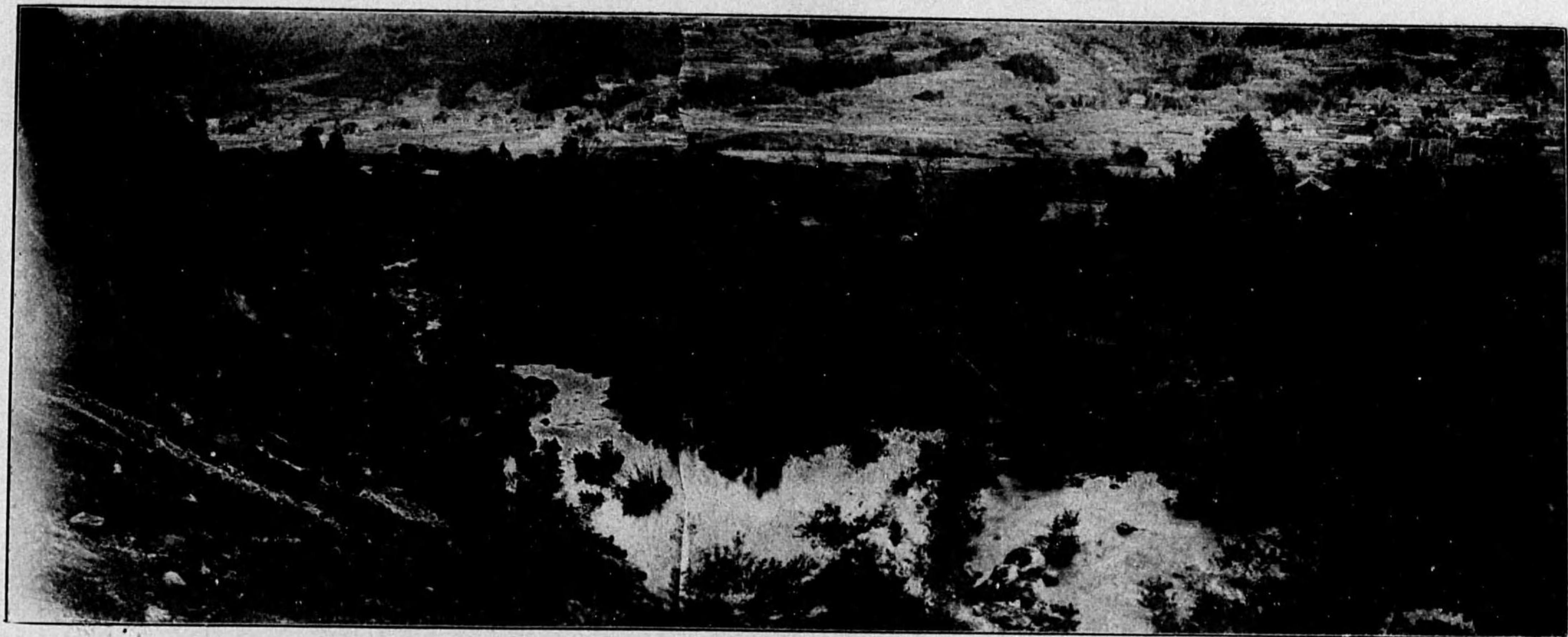
三約き長でしに間三至乃間二き高てしに起隆る隣に没陷の部北村見、中
 (才寫りよ東南)。るき斷切にめ爲屋家の面正。りな間十



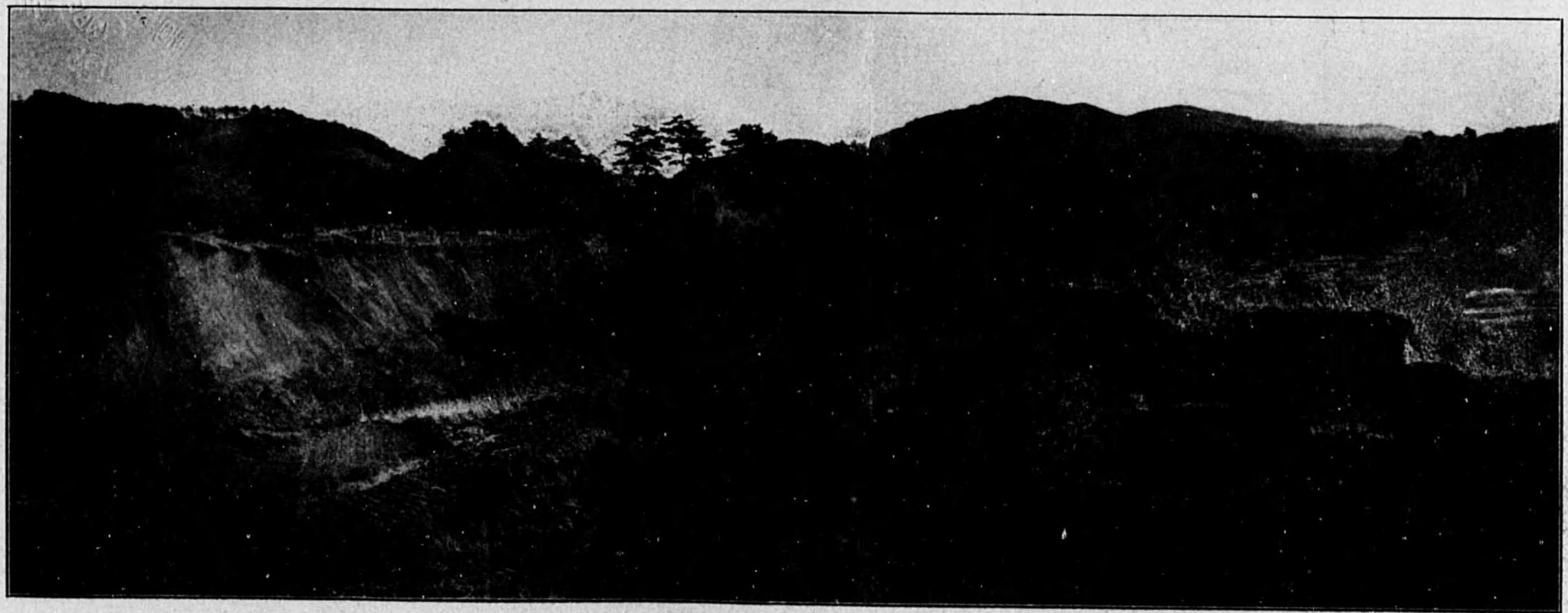
第四圖

(才寫りよ西南) 上 同





第五圖
上大見村原保山崩れ。幅員四十間、高さ約五十間
寫眞 左側の山、崩れて中央の川を越へ約五十間移動せり。
(南方より寫す)



第六圖
中大見村の北部山地の平坦なる畑地約一町歩陥没し深さ約十間
なり。



第七圖

三島町三島神社小祠の倒壊



第八圖

三島町保久町民家の倒壊

14.6-301

序

昭和五年十一月七日頃より伊豆北部に地震頻發し土地の方々が甚だ不安心なる由の報に接したるを以て取敢へず十七日に調査の爲國富技師を同地方に出張せしめ沼津測候所及三島支臺と觀測方の打合せをなさしめ一方に於ては臨時に地震觀測を二三の要地に開始する手筈を爲し廿五日には神奈川縣測候所とも打合せを了し廿六日を期して臺員を出發せしめんとせしに同日午前四時頃今回の大震が起りたるにより急に計劃を變更し廿六日の早朝國富、隼田兩氏を三島方面及伊豆西部に本多、藤村、淵三氏を箱根方面及伊豆中部に、鷲坂、木澤、市川三氏を熱海方面及伊豆東部に派遣して震域地方の調査に當らしめたり、又日本航空輸送株式會社の飛行機に菅原、三宅、妹田三臺員を乗せ空中より震域一帯を視察せしめたり、又廿七日には加藤、藤村兩氏を實況撮影の爲出發せしめたり、以上諸氏の報告を取纏め茲に北伊豆地震概報として之を刊行し大方の劉覽に供す。詳細なる學術的の報告は調査研究の完了を待ちて後日之を刊行せんとす。今回の調査に當り鐵道技師渡邊貫氏及有馬宏氏よりは踏査に就き又兒玉航空局技術課長、日本航空輸送株式會社阿邊浩兩氏よりも飛行機による視察について種々御援助を蒙りたるにつき茲に記るして深く感謝の意を表す。

昭和五年十一月三十日

中央氣象臺長

北伊豆地震概報

昭和五年十一月廿六日四時頃伊豆北部に發せし烈震は震源に近き地方に多大の被害あり家屋の倒壊土地の變動多く死傷尠からず今各地測候所の觀測資料次表の如し。



觀測所名	發震時 時分秒	初期微動 秒	初期方向	震度
三島	四・〇二・四六	一・五	南八三〇〇下 東三二〇〇下	六
沼津	〇二・四六・七	二・三	東南七〇〇下 東二三〇〇下 二〇〇〇	六
横濱	〇三・〇一・五	一・〇〇	東一〇三上 北一〇〇上	五
東京	〇三・〇五・〇	一・三〇	東七七一上 北八一上 三二九	四
布良	〇三・〇〇・〇	一・〇三	南六〇〇〇上 西三九〇〇〇上	四
横須賀	〇三・一七・三	九・八	東北東、上	五
熊谷	〇三・二一・〇	一五・〇	東一三・四上 北三三・六上 六二・九	四
甲府	〇四・一二	一	西一〇〇〇 北二五〇〇	四
飯田	〇三・一四	一	東南二〇八 東二〇八	四
柿岡	〇三・一二	一五・〇	北四〇上 東二七上 一六	三

一、最大動の振幅 中央氣象臺強震計の観測によるに其最大動の全振幅は水平動四十耗週期一秒なり、今是れを單振動として其加速度を計算するときは七百九十耗秒秒となる。

然して中央氣象臺の地震計の記録によれば、東京にての観測は次の如し。

發震時 午前四時三分五秒(初動東へ七七五ミクロン、北へ八一三ミクロン、上へ三二九〇ミクロン)
初期微動繼續時間十三秒、最大振幅(全振幅)四十耗週期一秒〇、總震動時間約三十分間。

而して震央に於ける最大加速度或は最大振幅等は斯くの如き大地震につきては別記實地踏査より推測する外なし。

一、近年の地震との關係 本年二月中旬より伊豆伊東町附近に頻發性地震を發し八月に至るまで同地方に於ては四千余回の有感覺地震を發したり、而して此地震が八月を以て一先ず靜穩に向へり。然るに同月十五日に今回の震央地方に當りて微震の發現あり次で九月二十八日には伊豆大島南方沖合に顯著地震を發し、更に十一月中旬よりは今回の震源地方にて地震を頻發せり。中央氣象臺三島支臺にては十一月廿五日午後四時より六時まで二十六回の有感覺地震を観測せり、是等の地震と今回の烈震との關係は尙詳細調査の上ならでは明かならざれ共多少の關係あるが如し。

一、震源 震源は遠方の観測より走時曲線等を論ずる時は一點と見做し得べきも今回の如き大地震を震央近くの観測より論ずる時は、一點と見做し得ざる場合を普通とす。本地震の初震源の震央は前記の

如く丹那附近に存在せり、然れども別紙の實地踏査を参照するに、地變の最も大なる箇所を擧ぐれば箱根の南東の元小屋山の大山崩れ、丹那附近を南北に走る大斷層、中大見村北部の大陥没、佐野及び上大見村の大山崩れ等にして、之等を結ぶ時は伊豆半島中央部を南北に走る長約三十軒の一帶となる。而して是等は倒潰家屋の最も多き韮山村附近の地變とは比較にならざる程大なり。

此の地變多き一帶が同時に變位せしや否やは未だ不明なれ共先づ始めにある小範圍の部分が動きたりと考ふれば初動方向より其の發震機巧を考へ得べく其の後の大地變は斯くの如く單純ならざる可し。従つて震波の初動方向によつて解析せる震源の機巧は此地震機巧の全般を説明し得ざる場合あるも當然なり。若し常識的に此の震源を解釋すれば蓋し前記の地變多き一帶の地域を震源と見做すべきを至當と思はる。

發震機巧 各地方測候所に於ける微動計記象より初動方向を求め、之れより此の地震の發震機巧を求めたるに箱根山より田代盆地、丹那盆地を経て浮橋に至る略南北の斷層線に沿ひ、西側地塊は南方へ、東側地塊は北方へ變位せる事を示す。即ち斷層の北西側たる三島、沼津、松本、長野、高田、岐阜、彦根、福井等の初動は南々東乃至東南東を指し、北東側なる東京、横濱、柿岡、熊谷、前橋、宇都宮、水戸等の初動は北東を指す。又斷層の南西なる濱松、京都、大阪等の初動は西南西を指す。故に或は前記斷層線に沿ひ斷層地表に現はれたるものあるや否やを確定せんが爲めに之を踏査したるに前

記斷層を明瞭に地表に認めたと共に他にも新斷層あるを認めたり。今左に各調査員の調査報告の概要を記述す。

六

北伊豆地震震央地踏査報告 (第一)

氣象臺技師 國 富 信 一

北伊豆地方に於ては本月七日頃より發震せる事は既に本月十三日報告せし如くなるが、三島支臺にては七日より十五日に亘り有感覺地震二十五回、無感覺地震二百四十五回を觀測せり。依つて中央氣象臺長の命により小官は十七日東京を發し沼津測候所三島支臺の地震觀測結果を驗すると共に北伊豆地方を踏査し十八日歸任せり。依て左に小官踏査の概要を記述せむとす。

地震の性質及有感覺地域

今回の地震は本年二月より五月に亘り頻發せる伊豆伊東町附近の頻發性地震とは其の趣きを異にし、震央地も亦伊東町より北西に當る山地にあるものゝ如し。

即ち沼津測候所に於ける微動計記象を驗測するに、初動極めて微弱なれ共、初期微動は三秒四にして殆んど一定せり、故に過般の伊東地震の際同所にて驗測せし初期微動四秒五よりは遙かに小にして、震央地北狩野の山中にあるが如し、而して又初動も南東下動を示し震央地北狩野山中に向へり。沼津にて觀測せる地震は大なるものにて最大振幅〇・一耗内外にて僅かに微震を感ずる程度なり。尙沼津測候

七

所にて観測せし無感覺地震回数左の如し。

十一月七日	二回	八日	一回	九日	一回
十日	ナシ	十一日	十五回	十二日	三十四回
十三日	五十六回	十四日	九回	十五日	百二十七回

三島支臺に於ける微動計観測によれば最大振幅約〇・二耗にして沼津より稍大なれ共初期微動は殆んど一定し二秒四の繼續時間を有す。又初動は明瞭にして南々東を指し、殊に上下動顯著にて其の初動凡て下動なり。尙有感覺地震は十三日七回、十五日十八回あり。

故に之れより推定するに震央地は三島を距る南々東約十軒北狩野の山中にあるものの如し。而して前回報告以後三島支臺にて観測せし地震回数左の如し。

月 日	無感覺地震回数	有感覺地震回数	合計
十一月十六日	百八十五回	十七回	二百二回
十一月十七日	百十三回	八回	百二十一回
十一月十八日	四十九回	二回	五十一回

踏査概況

依て小官は三島支臺長事務取扱淵本技手、沼津測候所技手藏重一彦氏と共に三島より葦山に至る一帯

の地を踏査せり。即ち大場附近に於ては地震の感覺三島町と大差なく極めて微弱なれ共東方山麓なる畑毛温泉、北奈古谷、南奈古谷、多田等にては毎日急激なる微震を感じ其の數極めて多く、時に戸外に飛出す程度の弱震を感ずる由なり。又地震に先ち、微動と共に地鳴を聞く由にして其の地鳴の性質より見ても震央地あまり遠からざるが如し。

葦山村に於ては南方山中より地鳴を聞き、矢張り毎日多數の微震を感ずる由なり。

之れを要するに三島支臺にては人身に感覺なく僅かに微動計に感ずる程度の微動も此の附近にては人身感覺あるが如し。

又之等多くの地震も凡て早朝四時乃至六時の間一定時間中に頻發し晝間及夜中には殆んどなし。之れは過般の伊東地方の頻發地震の際にも起りたる事實にして、歪を蒙れる地盤が潮汐氣壓等の外力の爲に釣合を破られ地震を發せるものにして、震源附近が大なる歪を受け極めて不安定なる状態にあるを思はしむ。

結論

要するに今回の北伊豆地方の頻發地震は温泉地帯に存在する活斷層の活動に依るものの如く、小地震を頻發して遂に終熄す可き性質のものなるか或は大震を發するに至てか慎重調査を要す。而して今回の地震の震源地は過般の伊東地方の頻發地震の原因たる斷層とは稍其の位置を異にし北狩野の山中より長

岡、古奈温泉地帯に平行せる斷層の活動によるもの如し。

故に尙暫らく斯かる頻發性地震は繼續す可く勢力も次第に増大すべしと思惟せらる。

尙附近村民は多數地震の頻發により稍不安なる状態にあれ共未だ人心動搖するに至らず。

三島支臺に於ては今後附近の詳細なる踏査をなすと共に益々觀測に留意し此の地震の調査をなす事とせり(十一月十八日記)

北伊豆地震震央地踏査報告 (第二)

氣象臺技師 國 富 信 一

氣象臺技手 隼 田 公 地

小官等は十一月廿八日午前七時東京を發し熱海より大場に至る、丹那斷層横斷の調査をなさんとせり。即ち熱海より三島に至る街道を進むに所々に崖崩れあれ共既に復舊工事竣成して自動車の交通可能となる。

熱海峠を越ゆるに及び崖崩れ極めて著し。更に進みて輕井澤より約一軒、田代への分岐點へ約三百米の地點に至れば南方竅より街道を横切る斷層に會ふ。此の斷層は略南北に走り道路を越えて谷間を蜿蜒として北方に進むを見る即ち丹那斷層の一なる東方斷層なり。

之れより北々西谷間を下り田代盆地に出づ、田代盆地にては西方丘陵をなせる畑に二條の斷層あり略南北に走る、而して其の北方は竅を横斷し田代盆地の西邊に沿ふて北進し約四十種の落差、約六七十種の食違ひを示しつゝ、北方の山を割りて進む。

更に田代盆地を後にして南方に進めば、田代より輕井澤に至る間道を縫ひつゝ、斷層の南走せるを見る、而して輕井澤盆地の下り口にては、斷層は小崖縁邊を南走し直徑五種五の樹根を切斷し、小川を越えて走る。

輕井澤盆地にては斷層は西方を走り民家を倒し、再び小川を越えて進む。而して丹那盆地への途中にては道路の西方にある小山を中央より縦斷し二條となりて更に南へ走るを見る。又田代盆地西邊に現はれし主斷層は丹那盆地中央に進み、新らしき二階建木造家屋を横り之れを倒しつゝ、南進し畑を越え丹那區畑及び乙越の中間にて最大の喰違ひを示しつゝ、竅を越え玄嶽山麓へと走る。

更に一方丹那盆地の中央なる唐澤川邊に一條の斷層あり主斷層に平行に南走す。

主斷層は畑部落附近にて水平の喰違ひ三米五、上下一米五の喰違ひを生じ、西側地盤は南方へ東側地盤は北方へ迂るを見る、之れ地震計によりて驗測せる初動の方向より考究し既に發表せし此の地震の發震機巧と全く好適するものなり。

小官等は更に大場方面へ進まんとし丹那西方に至れば二條の斷層道路を横斷し南北に走るものあり。

之れは輕井澤の西方小山を縦斷して南走せる斷層の一延長なり、時既に四時を過ぎ薄暮迫り、街道を西進するに日全く暮れて弦月既に玄嶽の山上に高し。更に進みて大場より大仁を経て修善寺に赴く、廿九日修善寺山上の大小二ヶの池水溢出せるを見て修善寺を發し下狩野を経て梶山の山津浪を見る。此の山津浪は東方四〇六米の奥野山上より落下せしものにて幅員約二町、狩野川を越え、その河原に至りて南北に擴がり幅員約十町に及ぶ此の津浪は厚さ約二十尺、ために三棟の民家を埋没し約十五名の死者を生ぜしめたるものなり。

更に北上すると下田街道には被害尠く大仁も震害比較的少なり、西に折れ小坂より長岡に至れば震害俄然著しく長岡温泉は家屋殆ど全潰せり、又其の東北方なる古奈温泉も同様甚大なる震害を蒙れり。葦山村は震害著しく東方山麓なる奈古谷、畑毛等は之れに比して震害尠し、更に北進すれば大場又震害著し。

要するに之等狩野川流域なる沖積層上にては地盤軟弱なりし爲め殊に大なる震害を蒙りたるが如し。本多、淵兩技手の調査によれば丹那より南方浮橋に至る道路に沿ふて丹那斷層の延長所々に現はれ、丹那區畑の南方五軒の間には道路を過り北々西より南々東に走る地割多く、更に南方にては道路に沿ひて南北に走る斷層あり、其の喰違ひ水平約二乃至三米、落差二米に及ぶ。而して丹那より約五軒迄の間には斯かる斷層道路を縫ふて走る。之れより南は所々に斷層の姿を見つゝ浮橋に至る。

浮橋にては葦山に至る街道と大仁に至る街道との分岐點に於て明瞭なる斷層の露出を見る。

浮橋の南方約五軒の地點にある横山村の北方に大陥没地帯あり又梶山の北東なる田代、年川、大野附近に被害著しく多少の地變あり南々西なる青羽根にては特に著しき被害あり。即ち田代、年川、大野、梶山、青羽根は北東より南西へ走る一直線上にあり、又原保より東西に走る龜裂線は其の延長青羽根に達すと見受けらる。

故に丹那斷層に直角に丁字形をなし原保―青羽根の斷層存在するか或は丹那斷層に雁行して田代―青羽根の弱線存在するか極めて重要な問題なり。

故に小官等は本多技手に其の根本的調査を依頼し明三十日より此の方面の徹底的調査をなす事とせり。

(十一月二十九日)

北伊豆地震實地踏査報告

氣象台技手 鷺坂清信

- 一、伊豆東海岸の踏査概要を述べれば次の如し、
- (一)小田原町 此の附近は強震にして所々に壁の龜裂を見る程度なれば被害少し。
- (二)根府川村 此處は大正十二年九月一日の地震の際は山津浪にて埋没されたる所なれども今回は石垣の崩れすら見受けず。
- (三)眞鶴村 眞鶴崎の附近は一般に震度強く眞鶴村及び岩村等は家屋の倒潰は見ざれども、硝子戸は殆んど破損せり。又石垣の崩潰、崖潰れ等あり。
- (四)湯河原 石垣崩壊せる箇所多く、其の爲家屋の敷石を失ひ、半潰せるもの數戸あり、而して平地は極めて地盤良き爲め硝子戸の破損等なし。
- 崖崩れの最大なるものは高さ十五間、幅十間位にして千年川を堰止む、其他數箇所あり。
- 震度は烈震としては最も弱きものなり。
- 湯の湧出量は一般に増加し、特に清香館の直徑七吋の湧出管二本は以前は管口上二吋噴出し居りしが地震後一尺程に激増す。又掘下げたるも湧出の見込なく放棄せしものが地震の爲め多量に湧出始

めしものあり。尙温度も幾分増加せりと。

五所神社の燈籠二個の中一個は北に、他は北東に轉倒せり。狗は逆時針様に三十五度廻轉し湯河原字廣河原の西方に當れる山(もとごやま)の大山津浪あり。

(五)大黒崎附近の海 千年川河口と大黒崎の中間に崖崩れ十ヶ所あり、其中三ヶ所可成大なるものにして、高さ六丈、幅三丈程ありて縣道全部を埋めたり。勿論車馬の往來不可能なり。

(六)稻村附近の海岸の狀況 大黒崎と稻村の間に崖崩れ十三ヶ所あり、その中大なるもの三ヶ所に於て、大きさ三坪程の岩塊二個を交へしものあり。

稻村より濱に至る途中に高さ八丈幅一町の大崖崩れあり、稻村の前後には長さ三十間、喰ひ違ひ、二寸乃至五寸程の地割多し。

稻村に於ては石垣東西に並べるもの、破損多し、震度烈震。

(七)熱海村字伊豆山小字濱 倒潰一戸、半潰八戸(何れも大したる事なし)。高處程被害多し。

(八)熱海 驛前の小學校住宅一棟倒れ教員三名、家族一名死傷す。又同處の商店數戸は石垣崩れの爲め破損せる箇所多し、但し埋立てせる所の石垣の崩壊に此等は基因するものにして倒潰十二戸、半潰五十戸なり。震度は烈震としては弱き方にして稻村や濱より小なり。温泉は大にして異状なきも町内の間歇温泉は地震後一時間程繼續して噴出し以後折々噴出す。

(九)魚見崎 此の邊は一般に地割れ及び崖崩れ多く、南方の海岸(赤根崎に向ふ)は殆ど引續きて大崖崩れあり、崩壊岩石の爲め道路を破損し、短日月の修理困難ならむ。尙通行極めて危険なり。伊豆半島東海岸中最も甚だし。

(十)赤根崎 此の附近の海岸は前項と同程度の崖崩れの状態なり、尙赤根崎より上多賀に至る途中の墓地に於て墓石數百箇の中大部分は北東方に轉倒せり。又田の畦道も北東に直角なるものゝみ崩れ他は異狀なし、同所神社の石燈籠二個の中一個は北東に倒れ一個は異狀なし、鳥居も半ば破損せり上多賀村、下多賀村、網代町邊は倒潰家屋なし(但し役場の調査にはあるとのことなり)此の間は車馬の行通可能なり、上多賀は烈震の弱き方、下多賀、網代は強震としては強き方なり。

網代町と宇佐美村との間に崖崩れの大なるもの一ヶ所。宇佐美に近きところより伊東までは自動車の通ずる程度なり。

(十一)伊東附近 伊東は強震としては強き方にして温泉には大した異狀なし、但し猪戸の温泉は一時停止せるものありしも漸次回復しつゝあり。尙伊東は倒潰家屋殆んどなきも硝子戸及び壁の龜裂剝離甚だしき程度なり、伊東以南の海岸には崖崩れ、道路の龜裂あるも、然し大したることなし。

伊東の東海岸は一般に岬に於て甚だし。而して魚見崎及び赤根崎附近を中心に震度は最も強く南及

び北に行くに従つて弱まる、北は眞鶴を越え南は伊東を越える時は震度は強震の程度に感ず。

二、伊豆中部の踏査概要を述べれば次の如く。

(十二) 柏峠 伊東より柏峠迄は道路に沿ふ小龜裂、石垣の所に崩壊せるを見る程度なれども、柏峠附近より道路の龜裂、石の轉倒等増加し、冷川村の橋は破損せるもの多く、家屋の半潰等ありて、震度は裂震程度なり。

(十三)中大見村 此處は伊豆の東海岸等に比し當底比較にならぬ程の烈震にして、道路の龜裂、石垣の崩潰等甚だし、中大見村役場の被害調査は左の如し。

埋没死者	六名
人畜死傷	壓死者 一名
	傷者 五名
畜類死傷	ナシ
家屋全潰	二二一
同半潰	五三二
燒失家	二

中大見村 の北部の山上の平坦なる畑地約一丁歩餘り陥没し其の深さ約十間なり。而してそれに隣

る谷合に隆起を生じ其の高さ二間乃至三間にして長さ三十間なり。尙此の村の南部及び南西部には幅二丁乃至三丁に至る山崩れ夫々一箇所あり。

尙中大見村にては字八幡に最も倒潰家屋多く、其の倒潰の方向及び土地に對する家の移動は定まらざれども、北北東、北東及び東微北のもの多し。

(十四)上大見村 役場の被害調査に依れば即ち死者、重傷者、輕傷者各一名、家屋の全潰一三八戸、半潰二一三戸なり。

字原部 は山崩れ二箇所あり其の中大なるものは、高さ二十間巾四十間程ありて、前方東微北へ五十間程地震と同時に大部分飛び小部分が川を堰止め而して此の奇怪なる山崩れのある山脈の反對側が雲金の大山崩れに當る。又原部を通る川の護岸堤の長さ三十間巾一間高さ一間位のものの中央切斷され四尺程喰ひ違ひ南部が約五寸降下し西方に移動す。

家屋の地面に對する移動の方向は十數戸各所にて測りたるも何れも東北方なり。歸途葦山村を通過せるも家屋の倒潰甚だしきに反し土地の變化は中大見村又は上大見村等より遙かに小なるを認む。

(一月二十六日より二十七日迄踏査十一月二十八日記)

北伊豆地震地域踏査報告

氣象臺技手 藤村 郁雄

氣象臺技手 加藤 倫助

十一月二十七日

田方郡下狩野村字佐野梶山の山崩れ 調査中最大の山崩れにして、走向は東南東より西北西、上端より下端迄斜距離約四〇〇米上部の切口約六米を目測す、山麓の民家三戸を埋没、押流して狩野川を埋め十五名の死者を出せり以てこの大なるを知る。

十一月二十八日

葦山、長岡、古奈、大場 被害最も甚しと目さる、箇處にして大地の龜裂は數多あり全倒半倒の家屋のみにして満足なる家屋なし、斷層線と覺しきものは此の附近に認めず。

大場より輕井澤 大場より鬢澤迄は家屋倒壊道路龜裂等多數あれ共鬢澤より輕井澤までは殆ど認めず。

輕井澤より丹那 南北に走る斷層線を追跡し道路の龜裂、田畑の隆起陷没の落差約〇・六米を測り宇畑に到り南北線に沿ひ水平ずれ二・四米を測定したり、尙同所にて上下の落差一・〇米を測定したり。

十一月二十九日

中大見村小字城の隆起陥没 實に見事なる陥没及隆起なり、陥落地は畑地約一町歩にして略馬蹄形をなし最大落差十四米を測量す、北六十度東の軸を有したり、隆起はその下方東側の田地に起り高さは最大五・一米にして長さ約百七十米巾最大二十米なり此の方向も亦北六十度東にして此の北六十度東の線上に建てられ居りし民家は上下に切半せられて物凄き自然の偉力を偲ばしめたり。

上大見村原保附近 原保の南方にて東西に走りたる斷層線を發見せり。原保、上大見村役場の南方四〇〇米の地點を過ぎ東西線を境としコンクリートの堤防北側は東へ南側は西へ最大水平ズレ一・〇米を有せり。此の斷層は西方なる部落宇姫の湯と原保との中間に在る小山を崩して西方姫ノ湯の盆地に抜けて蜿蜒として西方に走り家屋の多數ある中を其の線に乗らるる家屋に一、二戸を破壊して歴然たる經路を吾等に俯瞰せしめ西側の山に突入して遂に山崩れを起して走り居る様眞に壯觀なり。

翻つて原保の東南方菅引に到れば是又田畑を上下落差〇・三米にして巾百米を有する大斷層南北に走るを目撃したり、吾等是により輕井澤より丹那を抜けたる大斷層尙嚴として南北に走り居るを知りたり、是の斷層線に沿ふて果して北方の山腹に山崩れあり、然して此の線上の家屋は神社と云はず小學校と云はず、あらゆる行手を妨ぐるものは突破され猛威を示すに任せられたる様實に偉觀なり。

而して此の菅引に於て斷層線は明かに南北及東西に直交せる事實を認め此の現場に接したる吾等は雀躍して歸台せり。(加藤藤村兩技手の發見せる東西斷層を再調査せしむる爲め本多、淵兩技手を同地に派

遣す中央氣象臺長)

箱根山附近地割調査報告 技手田島節夫、技手北澤貞雄、箱根町より三島町に至る。三島街道上にて接待茶屋と山中の中間より田代に至る南北線に龜烈喰違ひあり。最大の喰違ひ六寸、落差六寸西側は南へ東側は其の儘なり。

(十一月二十九日記)

三島街道方面踏査報告

三島支臺 氣象臺技手 山 内 英 雄

三島神社の石燈籠は殆ど全部倒る。其の倒れし方向は殆ど全部が南方なり。(一番遠く飛ばされしものは一米三なりき)。

塚原新田より出ずる新道は全潰。

三島より市山新田に至る道路の龜裂は、道路に並行(方向北東)なるものとこれに直角なるものと必ず交互に起れり。而して並行なる龜裂は盛土せる如き軟弱なる道路上に、直角なる龜裂は山腹を削りたる等堅き道路上に表はれしものと思はる。概して龜裂は大にして幅員約二十二種、深さ約六十八種なり。

三谷新田にては坂小學校校舎中東西に走る一棟は全潰(南方へ倒る)南北に走る二棟は半潰(南へ傾く)なり。笹原新田の地割は前述の地割と同じ。

全潰戸數は塚原にて四戸、市山にては三戸なり。山中新田にては三十二戸の中全潰三戸、四戸は稍完全他は半潰なり。

山中新田の東南方の谷の北側の山腹崩れ落ちて谷底を越へ、向の南の雜木林の山腹の三分の二邊迄一旦登り、更に落ちて谷底を埋む。此の山崩の爲、二戸埋れ七名生理さる。落ちたる地の面積は約二丁歩に

して、二十尺掘りて埋れし家屋の屋根漸く見えたりと云ふ。

山中新田より接待茶屋に至る新舊道路は共に龜裂烈し。山中城址を中心として接待茶屋に至る舊道の南側の山腹には龜裂、地_二等一面なり。

無線局官舎の障子全部紙破れ、柵(東西に走る)は皆南方へ傾く。

舊道より官舎に至る道は道路の走る方向(北北西)に龜裂烈しく、幅員約一尺にして割目に盛土の如き軟き土溜れり。

此の邊一帶龜裂無數なれどもいづれも幅は約一寸位なり。海平の防火線上に防火線の走る方向に數條の可成り深き龜裂ありて尙先に進めり。

箱根觀測所に於ては風力塔は約四十五度南に傾き、風力塔の南側の扉半分地に埋れり。

應舎のコンクリート土臺は四寸乃至七寸の長に割られ、事務所の西側の大タンクは南側に倒れて破壊しバラ／＼になりて破片散亂す、應舎はコンクリート土臺よりヅリて、土臺開き床下は木材離れ放れになり外見は左程でなければ内部は甚だしく破損し危険の状態にあり。

無線局より新道に沿ひて約二丁下りし所にて道路上に方向東南東(道路に直角)幅員約六十種にして高さ約三十九種の隆起あり。此の隆起より約百三十歩位下りたる所に幅員約七間、五十歩の長の道路の陥没あり、この陥没より一丁の處に、約四十歩の長の道路の陥没あり。(十一月二十六日)

湯河原及箱根地方踏査報告

神奈川測候所長 高 木 健

一、湯河原 伊豆屋旅館の屏垣の土臺は龜裂を生じ、平面上の割目の方向は南四十五度東なり。其の他多くの道路、石垣等は南二十五度西に龜裂し、或は崩壊せり。

不動瀧より北六十五度西の崖は幅二間程崩壊せり。瀧より南二十度西五間程の處にある三年程以前よりボーリングをして居りし場所より地震直後鹽類泉噴出す。(以前はモーターにて吸みとりぬたりしものなりと)

廣河原温泉プール家屋に僅少の被害ありたり。又道路を距てたる屋根の先端は川敷上にて巾約二十間程崩壊し、小川を埋め、道路を遮り河水を湛へて潜水溢るゝ恐れあり。其の崩壊方向は北三十度東にして第一動にて崩壊せりと。

廣河原の上方にて川の分岐點より西北西約千米の處に巾一町、面積一町歩程と思はるる元小屋山の大山崩れあり。此の山崩れより南に東約五百米の處にも小山崩れあり。

湯河原小學校の石垣十二三間崩る。又湯河原温泉の入口の人家の石垣の小崩れ。數ヶ所あり。

一、湯河原驛前 道路の南側約三寸の喰違ひを生ず、移動方向は南十八度東なり。又驛の南方の山口

にも崖崩れあり。

一、箱根 宮の下以上は山角及道路到る所崩壊又は龜裂し上方程震度大なり。宮の下驛より下方にて電車線路に故障ある様に認められたり。芦の湯より湯の花澤に行く道路上、芦の湯小學校前に於て道路を横斷して南十六度西に走る龜裂數條あり(駒ヶ嶽登山口山頂まで二十八丁標杭の前)全部の巾五尺なり。學校上の道路分岐點の下方約十間の處に南北の龜裂あり。

曾我神社に於ける紙屑入れは北六十八度東へ倒る。又清水茶屋の側の水濁る。次に湖水は箱根町橋本屋棧橋に鯨尺七寸七分減じ居れり。

地震少し後孫助山の山崩れの土砂押しのため、萬福寺埋没し一名死す、其の土砂押しの中約五十間に於て寺の屋根のみはがれ、堂等は皆埋没し裏の立木は二十間程押し出さる。(十一月二十八日記)

北伊豆地震地域踏査報告

氣象臺技手 本 多 弘 吉
同 淵 秀 隆

十一月二十六日午前八時半東京發正午小田原着、小田原警察署に於て箱根方面の被害豫想外に甚しく自動車不通なる由を聞く、徒歩箱根に向ふ。

湯本 水電の送水管破裂し道路流失せし由。

塔の澤 上總屋の隣に於て一旦噴出の中止せし温泉新に噴出し初めたり。

宮ノ下 駐在警察官の談によれば仙石原、宮城野方面被害殆んど無き由、又大涌谷噴煙平素より少しく多きも特別の異常無き由をもつて直ちに箱根町方面に向ふ。

塔の澤より上道路至る所龜裂、陥没甚しく又上方よりの落石堆積する所多し。

大平臺の見晴場の家屋半壊。

小涌谷より芦の湯まで辛じて自動車通ず。

二子山 巨石の崩れ落ちし道筋、山腹に歴然たり。

芦の湯 大被害あり、松坂屋の本館及玄關一尺、東に移動し、同館の石門一つは東に一つは西に倒る。

駒岳の山腹(芦の湯寄り)少し崩る。

此處にて日暮る。

元箱根 八十戸の中全潰二十、他は半潰、死傷者無し。地震の五分位後湖水二尺餘高潮せし由、尙同地の水位計に地震による湖水の靜振明瞭に現はる。

箱根町 駐在警察官の談によれば一度に上下動烈しく約一分後鞍掛方面に著しき山鳴を聞きし由。同町百十三戸の中被害少きもの僅かに十七戸、半潰二十六戸、他は全潰、負傷者五名、行方不明九名(その内八名はムジナノクボの山崩に埋めらる)

夜の闇を突いて箱根山測候所に向ふ。途中道路の龜裂陥没崖崩れ極めて甚し。微弱なる餘震數回來たる。その際山鳴甚だし。

箱根山無線局を見舞ふ。同局の機械大破せり。

箱根山測候所に登る道路甚だしく破壊す。午後八時同所着。

箱根山測候所 本舎は北西に移動する事五寸。

風力塔半ば倒る。タンク破損。

舎内の器具類殆んど全滅せるも所員の努力により應急の修理成功し氣象觀測差岡へなく行はる。時々微弱なる餘震を感ず。尙同日飛行機による視察員よりの通信成功、又大阪航友會より飛行機によ

り御見舞を頂戴す。

二十七日 未明直ちに箱根町に下る。町内の道路も甚しく破損、同町の東側なる澤入山、山津浪となりて四五町押出す。爲に麓にありし萬福寺は一町餘押し出されて埋まり一名生埋となる。

鞍掛山に登る。途中の高壓線のコンクリート電柱地上約三間の所にて折れ、山腹のやゝ平たき所にて端に於ては等高線に沿つて東西に龜裂走り奥にては北西に走るもの多し。

野馬池異常無し。

鞍掛山を越へて十國峠に登る。その附近山腹の表皮づれ落ちし所多きも特別なる龜裂及び陥没を認めず直ちに熱海(三島)街道に下り輕井澤に向ふ。道路や、破壊し田代、輕井澤を連ぬる線著しく龜裂す、丹那盆地に下りしも日暮れて視察不可能となり農家に宿る。

二十八日 早朝丹那盆地を見る。盆地の中央を南北に連ぬる著しき龜裂を認む。而もそれは田代、輕井澤、畑、浮橋と一直線に連なる如し。

盆地の中央を南北に走る龜裂は東側は西側に比し約七尺北に移動す。上下の段違ひは左程著しからざるも東側は西側に比して隆起する所多し。この龜裂線に沿つて浮橋に向ひ南行す。宇畑の南高地より見るに盆地の龜裂線に沿へる部分幾分沈下せる如し。

龜裂の線は南に續き玄岳と萑山の間最も著しく而も兩山の間南北に走る谷、幅約一町半、約二尺位

低下せり。この龜裂の線は次第に分明を缺くも浮橋に於て再び著しく現はれ矢張龜裂の線は南北にして東側は約四尺北に動く。吾人の追跡せし田代、輕井澤、浮橋を連ぬる南北の龜裂線に於て北西より南東に向ふ小龜裂の雁行せる傾向著しきを認む。

それより田京に急行、途中大野小學校全潰。

二十九日 三島より横瀬を通りて中大見村に至る。大場、萑山、長岡等家屋の被害は大なるも道路田畑に龜裂を認めず、土地の振動はこの方面は左程劇烈ならざりしが如し。

中大見村宇横山の山腹の畑地約一町歩陥没しその最大落差約七間、而してその東側に長さ八十間幅八間高さ十七尺の土地隆起す。

中大見より横瀬を経て湯ヶ島に向ふ途中年川被害甚し、横瀬より湯ヶ島に至る間佐野に大山崩れあり家屋三軒埋没せらる、而して他に著しき被害なきに青羽根のみ被害顯著にして而も道路を東西に横断する龜裂數條を認め且同部落の東山腹に山崩れあり。

湯ヶ島よりやゝ南に小なる崖崩れあるも其の他には異常少なし。

三十日 中大見村及び上大見村に行く。

上大見村の原保の東端より菅引の北を通り丸野山に入る北々西の龜裂線あり、同線の東側は北に異動す、原保の少しく南より一方は東に向ひ他は姫の湯に向ふ著しき東西の龜裂線あり而して線の北側は

東に移動し且隆起せる所多し、この線を西に追跡するに姫の湯より雲金に至る山道の大半に於いて之を認む。而もその途中この線上東西の谷間一、二尺沈下せり。而してこの龜裂線は青羽根に連なる如し。

吾人の踏査の結果を取りあへず要約すればこの地方には、箱根、田代、丹那、浮橋、原保と南北に走る大龜裂線と、之に直交して、原保、姫ノ湯、青羽根と東西に走る龜裂線あり。而してその移動の様は圖に示すが如し。而して之より察するに南北及び東西に通ずる二つの大龜裂線上北西より南東に走る小龜裂の雁行するもの多きは所謂張力裂罅 (Tension crack) に相當すべきかと思惟せられ極めて興味深きものなり。

又大體として沈下せる所多く、且つ水の涌出量一般に増加せる如し。(十一月三十日記)

飛行機による北伊豆地震地域視察報告

氣象臺技手

同 同

菅原

妹田

芳甚

恒夫

十一月二十六日午後一時三十六分立川を出發す。

大山の山頂を右に見乍ら機は千米の高度を保ちて飛ぶ。近邊何等の異狀なし。

小田原を左に見て箱根にかゝれば登山道所々に小なる崖崩れあり。二子山附近にて稍顯著なるものを見たり。大湧谷の噴煙は平常と余り變化なし。

箱根町は完全なる家屋は二三にして大部分は大破しむたり。箱根ホテルは中央部陥落せり。箱根山測候所は本館傾斜し、風力塔は倒れ、貯水タンク其他の附屬建物大破せるを見たり。四名の所員は本機を見て盛に手を振りたる故皆無事なりと推察せり。

箱根航空無線局は外觀上無事らし。

測候所附近より丹那盆地にかけて龜裂甚だ多く其方向は大體芦の湖の長軸と平行なり。

三島町は外見上大なる被害はなきが如し。又火災の痕跡も認められず。三島支臺は無事らし。長岡、古奈兩温泉は相當の被害を受けたる様子なり。其近くの池水は黄色に混濁せり。

修善寺も道路等の崩れあるを認め相當の被害ありと推察す。以上の諸町皆火災はなき模様なり。修善寺の少し南にある日向附近に最大の山崩れありて半ば河川を埋め、それより下流を著しく黄濁せしめたり。又其山崩の爲家屋及人畜に相當の被害あるやに推測せらる。又附近に小なる山崩れ多し。箱根山より天城山に至る山脈の西側に龜裂多く其方向は主として東西に向ふものゝ如く又東側の龜裂は概ね南北に向ふが加し。

湖沼の内、芦の湖は中央部は清澄なるも、周囲は黄濁しむたり。又修善寺附近のものは何れも著しく黄濁しむたれども、伊東町南方大池の水はよく澄めるを認めたり。

天城山には異状なく、大室山の頂上に龜裂あるを認む。

伊東町は家屋の倒壊は余り認められず。午後三時いまだ火災の余燼ありたり。二三十戸焼失の模様なり。

熱海、網代の町には外見上大なる被害なけれども海岸線には崖崩れ多く、又所々に龜裂あり。殊に網代町南方の海岸線の道路は被害著し。

湯河原には地割れあるも家屋の被害は認められず、それより再び箱根山測候所に至り通信筒を落し午後四時九分過ぎ立川に歸着せり。

(十一月二十六日午後五時記)

箱根方面被害踏査報告

神奈川縣測候所測候技手 川 名 徳 一

塔澤附近崖崩れ多し、早川濁る。

湯本町被害なし。

湯本茶屋より畑宿に至る道路は須雲川に沿ふて所々龜裂し小崖崩も多し。

畑宿にては家屋東寄に傾きしもの多し。

同所の最も高位に當る所にありし寺は二子山續きの峯高さ約五六百米の所より山崩れありし爲埋没、六名程生き埋となる。

畑宿より醴茶屋に至る舊街道は二子山より崩落せる著しき巨大の岩石を以てメチャク／＼になる、まつまつた大なる山崩れなし、芦の湯松坂屋一尺位東にズレし由聞く。

元箱根にては略東―西の方向に家屋は殆んど半潰せり。半潰も全潰に等しき程度のもの多し。

箱根神社等にある家屋には異状なし。

箱根離宮内には略北東―南西の向に龜裂あり。

官舎は山崩の爲、半埋没の程度に倒壊。

箱根町の道路は全潰せり、倒潰方向は略東—西なり。

箱根町裏の孫助山の中麓より五六丁押し出す、山津浪ならん。其の爲に寺埋没し一名生理となる。

箱根町より三島街道を縣界に至る間、小龜裂は無數なるも大なるもの九ヶ所あり。龜裂の方向は道路に並行或は西寄なり。縣界にあるコンクリートの電柱上部西方に向つて折れる。

元箱根より箱根町に至る杉並木通り道路に並行なる龜裂を生ず。路上一面杉の小中枝無數散亂し震動の著しき事之よりも想像さるゝ感あり。

發震と同時に西方より芦の湖にては五六尺程の波押寄せしと云ふ、波は國道迄上りたる由。

箱根町側にては震後、湖水五六寸減水せるも湖尻側にては増水せりと聞く。元箱根の水位、廿四日は一・七六米、廿五日は一・六九米、廿六日は一・五五米、廿七日は一・五三米。

芦の湖の南側の山には所々山崩あり。

右の内ホーキの鼻の窪では十名位生理となりし由。

海平にある箱根山測候所應舎北へ五寸、西へ四寸五分移動せり。風力塔約四十五度位の傾を以て略南に到る。鞍掛山には主として西或は北西に走る著しき龜裂多數あり。中腹にある池には異狀なし。

鞍掛山より十國峠に至る山峯には道路に沿ひて小龜裂所々にあり。十國峠には所々小なる崖崩れあり。望遠鏡にて見るに湯河原方面の山岳一帯には其の他に大なる異狀なし。



丹那トンネル西口崩れ、一名埋没と聞く、東側口には異狀なし。

丹那盆地方面より歸りし鐵道員の談によれば、田代、丹那、浮橋を貫く長さ約三里に渉る地域には巾約九尺の龜裂著しく、其の上に當る部落は全滅せりと。(十一月二十八日記)

結 尾

要するに今回の調査により北は箱根山南部より田代盆地、丹那盆地、浮橋を経て菅引の南へ走る、延長略三十軒の大斷層あり、此の斷層を境として西側地塊は南へ、東側地塊は北へ變位せる如き機巧により地震を發震せし事明白にして前記地震計の觀測による結果と全く一致せり。又此の大斷層に略直角に菅引より貴僧坊を経て、青羽根に至る略東西に走る斷層線ある事を發見せり。即ち北伊豆地震は箱根山より丹那を越えて南方に走る舊斷層線を境として東西兩地塊の間の相對的地塊運動により生じたものなり。而して又丹那斷層及前述せし他の斷層は互に直角に交り、丁字形をなせる二條の斷層線よりなる事明白となれり。此の他青羽根より狩野川沿岸なる佐野、日向間の龜裂及奥野山の大山津浪を経て田代、年川を連ね略南西より北東に走る弱線あるが如し、此の弱線は丹那の大斷層に對し或る傾斜をなす。而して斯の如き弱線果して實在するや否やは目下調査中に屬す。

一、津浪 中央氣象臺附屬布良測候所の驗潮儀記象には十一月二十六日四時二十一分より約三十分間に亘り微弱なる津浪を現出したり、其最大振幅は約二十糎なり、多分此地震に依るものならん。

一、前震と餘震 今回の北伊豆烈震は多數の前震を伴へり、今中央氣象臺三島支臺にて調査せる前震回数を左表に掲げん。又余震は此の種の烈震にしては極めて寡少なれ共、或は前震多かりしたためならむも知れず、又余震中箱根山方面に起るものあり、時に弱震を發せり。之れは前震中箱根山方面に起りしもの殆んどなかりし爲め、特に此の方面に起る余震著しきためならんか、調査を要すべき事なりとす。

日	附	有感覺地震	無感覺地震	計	有感覺地震積算合計	積算合計
七日		1	2	2	1	2
八日		1	1	1	1	3
九日		1	1	1	1	4
十日		1	1	1	1	4
十一日		1	1	1	1	4
十二日		1	3	4	1	5
十三日		7	5	12	7	12
十四日		1	9	10	1	13
十五日		1	12	13	1	14
十六日		1	18	19	1	15
十七日		1	11	12	1	16

十八日		2	4	6	2	8
十九日		1	9	10	1	11
二十日		1	16	17	1	12
二十一日		3	25	28	3	15
二十二日		2	5	7	2	17
二十三日		1	22	23	1	18
二十四日		1	3	4	1	19
二十五日		7	52	59	7	26
二十六日		7	27	34	7	33
二十七日		1	9	10	1	34
二十八日		8	6	14	8	42

尙中央氣象臺に於ける餘震觀測の結果は左の如くである。

中央氣象臺余震觀測表 (至十一月廿八日)

日	附	發震時	初期微動繼續時間	總震動時間
十一月二十六日		五時四十六分〇二秒五	十二秒六	二分十秒
同		六時四十五分三十九秒	十三秒二	三分十秒
				三七

熱海警察署 (郡方田)					沼津警察署											
下狩野村	中狩野	上狩野	上大見	中大見	下大見	北狩野	戸田	士肥田	西室	修善寺町	沼津市	静浦村	清水村	深良村	泉村	長泉村
一	一五	一	一	二	七	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	三	二	二	八	二	七	三	一	一	三	五	一	一	一	三	二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一八	一	三	九	一〇	三〇	一	一	一	四〇	六	二	二	一	四	二
一〇	六〇	一	一・二	三〇	六・七	七・二	一・五	七・六	一	一・五	〇・二	〇・二	三・九	一	一	一
一三	四〇	三〇	五	三〇	三〇	六三	二二	一	一	二二	二二	二二	一〇	一	一	一
一五〇	一五〇	三	約二〇〇	約一五〇	約一〇〇	一六七	一〇〇	一〇	一	一〇〇	二〇	二〇	二〇	一	一	一
一六三	四五	三五	二〇五	一八〇	一三〇	二三〇	一二二	一一	一	一一	二二	三〇	三〇	一	一	二
三〇〇	八〇	三〇	四〇二	三二・四	四四・三	三一〇	九・九	一・一	一	九・九	〇・三	〇・三	三・三	一	一	一

四〇
三戸埋没
公園ノ堤防缺潰、池水氾濫
流失家屋數戸、温泉多量湧
出
東京電燈田京發電所倒潰、
馬一頭斃死
今製糸工場八棟全潰職工五
二〇名一時歸宅

伊東警察署 (郡方田)

大岡村	金岡村	鷹岡村	伊東町	宇佐美村	小室村	對島村	城東村	市町	村	備考
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二五
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一三
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一五
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二五
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	九六
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三三
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	八二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一六
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二六

六三 燒失損害約二十三萬圓
地震ノ爲山崩アリ一家壓死
タル爲、修善寺町死者二名減ハ死者トシテ計上シタルモ屍體判明セズ行衛不明者トシテ取扱タルニ依ル
宇佐美、小室、對島各村ニ於ケル全潰、半潰家屋ハ損害其ノ程度ニ至ラサリシ爲削除
三島町、中郷、函南、韭山各村ニ於テ全潰、半潰戸數ノ減シタルハ損害其ノ程度ニ至ラサルモノ或ハ所屬建物等ヲ計
上シタル關係上、誤算ヲ生シ本表ニ於テ訂正
千分率ハ大正十四年國勢調査ニ於ケル人口ニヨリテ作ル、百分率ハ同調査ニ於ケル世帯數ニ對スルモノナリ但シ若ノ
湯村箱根町元箱根町等ニ對スル分ハ内務省原屬報告現數ニ依ル

神奈川縣下地震被害取調表 (二十七日夕刻迄ノ分)

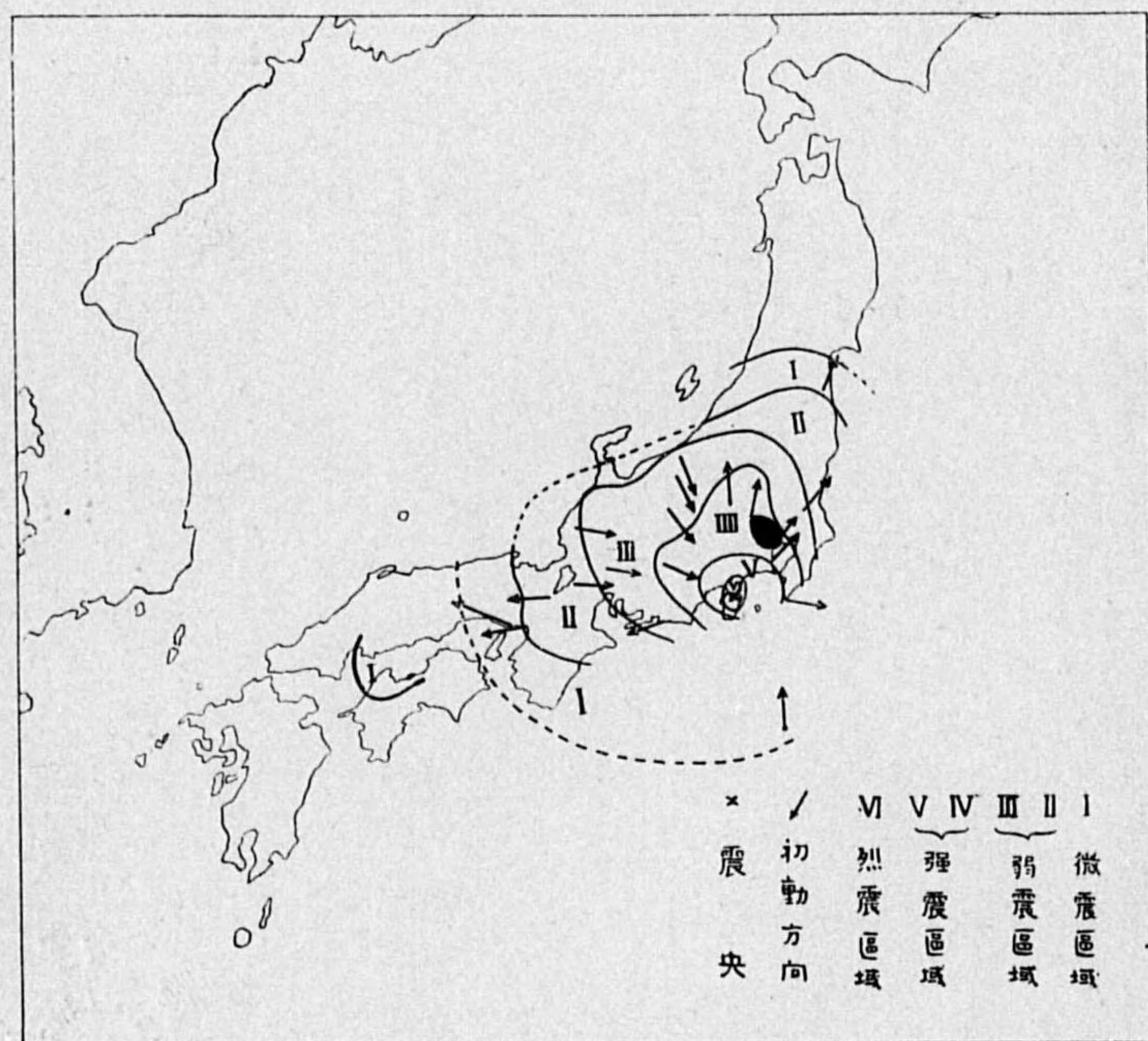
町村名	人		戸			浸水		備考
	死	傷	全潰	半潰	計	床上	床下	
元箱根村	一	一	八二〇	二八二	一一〇二	一	一	
箱根町	一五	八	二四・四七〇	二六	九六八	五〇	一	箱根離宮本屋全潰ス
湯河原町	一	一	一	一	一	一	一	
湯本町	四	一	四	一	三三	三四	五	二一七
温泉村	一	一	一	三	四	一	一	
宮城野村	一	一	二	一	二	一	一	
芦ノ湯村	二	一	一〇	一一	一九	二六	一	
横須賀市	一	一	一〇〇	一	一	一	一	
南足柄村	一	一	一〇・三	一	一	一	一	

右表に依り人口及世帯數に對する死傷者及全半潰家屋數の千分比を作りたるものを圖に記入し見るに共に斷層線を軸とし稍西方に部厚なる南北に連る楕圓形をなすを見るべし。

此外被害に關して尙注意すべきものを擧ぐれば道路破壊は足柄下郡箱根方面より田方郡南部に至る一帶の激震區域に起り鐵道の不通となりしは熱海線、箱根登山鐵道駿豆鐵道にして東海道本線に於ても、御殿場裾野間に輕微なる故障不通個所を生じたり。

伊東町は震度は左程に非ざりしも關東大震災當時津波を被りたる經驗上、津波を恐れて山上に逃避し消防に盡力せざりし爲大事に至りたるなりと云ふ。

震度分布圖



昭和五年十二月二日印刷
昭和五年十二月四日發行

編輯
行纂
者兼

東京市麴町區竹平町
中央氣象臺

印刷者

東京市牛込區津久戶町二三
小山壽夫

印刷所

東京市牛込區津久戶町二三
成交社印刷所

147
301

終